

3.11

記憶されるべき

ことは何か

作品と作家の説明

「3.11 プログラム」は素朴な動機で編まれた。われわれと同じようなインディペンデントな映像作家たちは、その時何を考えていたのだろうか？ 彼らにとって「それ以前と以後」では何かが変わったのだろうか？ という問いを彼らに発してみたかった。したがってこれらの作品は、何かの統一された意志や政治的主張に向かうものではない。それぞれの場で体験された「その時」が、それぞれの「その後」を伴って編まれた映像の集積である。

SVP2 <http://svp2.com/>



a few minutes later

その瞬間、私は自分の家に居た。
それから数分後。事態の急変が人々を動揺させた。
カメラは私がいるはずだった場所があり、私が見るはずだった状況を記録した。その時を記録した映像と、その後には耳を離れなかった音、そしてあまりにも膨大なデータの集積が私の中でひと繋がりになる。
それらはとても不快で不安な連鎖だった。
心地良い風景がふとした瞬間に、また一変するような錯覚を覚えた。

協力：東京工業大学サイエンス&アートラボ
Creative Flow

佐藤博昭 (さとう ひろあき)

教員ビデオ作家。ビデオアートの自主上映組織 SVP2 代表として、これまでに 16 回の自主上映イベントを行う。2009 年には「日本・マレーシアビデオ交流展」を主催・運営しマレーシアのビデオ作家 5 名を招いた。また、各地で高校生の映像制作ワークショップなどを開催している。



dot

「ご支援いただきありがとうございます」
自分の会社が建っていた場所を眺めながらある女性が私に言った言葉です。
3.11。私はメディアを通して、日本が絶望に支配される光景を眺めながら自分の無力さを感じていたように思います。しかし現地私に向けられる言葉は感謝の言葉でした。
彼女たちにとって全国の人々との繋がりはどんなにか支えになったことだろう。
そして、絶対に忘れる事はない光景の中で私は、自分が育った場所を思い出していました。

黒崎陽平 (くろさぎ ようへい)

群馬県出身 1988 年／神奈川県在住
日本工学院専門学校在学中に映像制作を始める。現在は岩波映像(株)でVPを中心に多くの映像に携わりながら、個人では「対人」をテーマに表現活動をしていきたいと考えている。

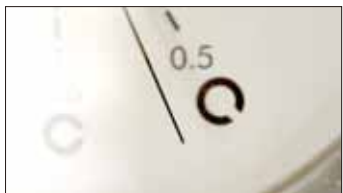


swimming up from Fukushima gulf to home river

福島第一原発から 25km ほどのところにある福島県南相馬市に流れる新田川 (niida river) には今年も鮭が遡上しています。
鮭は、卵を産み自分たちの未来を紡ぐために荒波や逆流を超えて故郷の川に帰る習性を持っています。その力強い姿は、放射能と対峙しながらも復興に力を注ぐ南相馬の人々やあるいは、原発後処理や経済不安など様々な逆境と立ち向かわなければいけないこれからの日本人の姿を象徴しているようでもあります。
Fuck the radiation!!!

足利 広 (あしかが ひろし)

千葉大学、the School of Art Institute Chicago で映像制作を勉強した後、国内外での個展、グループ展、芸術祭参加を主な活動としている。2011 年 Franck Muller Art Grand prix 審査員賞受賞。2011 年 Tokyo Wonder Site 第六回企画公募入選。



五十 (iso)

たくさんを意味する イソは五十。大地が揺れ、都市機能が麻痺し、安全神話が崩れ、経済ゴジラが出現した。この怪獣に立ち向かわねばならないが、いったいどの様にすればいいのだろうか？



A growing historical evidence in my life

巨大な津波、荒野と化した街、余りにも多くの人たちが亡くなったこと。私にとってそれらはすべて情報でしかない。悲しんだり恐怖したりするのもすべて想像の中である。鈍感な私の感受性では周囲の人ほどに悲しみもない。不確かでごまかしや隠蔽もある情報をよりどころに私の日常の中に歴史的な震災が作られていく。

梵淡水 (ぼんたんすい)

1961年 滋賀県生まれ。2001年混色採集。2008年フィールドワークス(写真・ビデオ)。網膜を洗い流し、固着した鼓膜を震わせるため、インクと水を画用紙に向かって落とし、日常の空間に向かっては録音機と写真機とを差し向けて、未だ準備のような毎日を繰り返している。美しい色・形・音は身近に無数に散らばっている。沢山は集まったがさてこれらはいったいこのままでいいのかと立ち止まった。この集積はひょっとして私自身だろうか。そうかもしれないが、さらにここから選び出さないといけないのだ。再び私にじゃまされながら。

服部かつゆき (はっとり かつゆき)

1973生。《動く画をつくる・おしえる》を軸に活動をしている映像作家。これまでクアラルンプール実験映画祭、プリントイラヤフェスティバル 0.2、ビデオプールなどの国内外の映画祭やメディアセンターで作品を発表してきた。近年は《動く画と学びのコーディネーター》としてワークショップのファシリテーターに専念し、子供と大人が共に楽しめる、体験・交流型の映像制作と学習の場を展開している。SVP2 団員。



SKY DON'T FALL

空を見張っている。
空が落ちてこないように。
ハトがいつでも飛んでいるように。
だって子どもも飛ぶんだ。

ずっと空を見ていた。
空が落ちてこないように見張っていた。
そしてわたしは、月が銀行の看板の向こうへと沈んでいくのを見た。

中村明子 (なかむら あきこ)

栃木県出身、東京都在住。1997年サンフランシスコ・アート・インスティテュート(米カリフォルニア州)卒業後、映像制作をはじめ。00年代は翻訳及び通訳業に従事する一方でアートスペースの運営や上映会の企画、様々なアーティストとの共同制作など多岐に渡り活動、近年はじっくり制作しながら国内外で作品発表を続けている。現在は初の長編映画(自主)を準備中。



Voice of farmland

ある大地には、稲や桃、林檎が実り、鯉が泳いでいました。先祖たちの墓があり、死者を守る人たちが暮らしていました。僕たちはそうした歴史から知恵を得、豊かさをわけられ、次の世代へ引き継ぐ準備をしてきたはずでした。
ところが今年3月、不意にその役目を果たせないことが決められてしまいました。

東 英児 (あずま えいじ)

福島県郡山市出身。映像を使った地域活動を積極的に行う。新宿区大久保地区で出会った在日フィリピン人少年らとの出会いをおったドキュメンタリー映画『KAIBIGAN』(2011年/18分/HD)が、「ルーツ2フィルム」映画祭(2012年2月/神戸)にて上映された。2012年、沖縄へ移住。



the lake

現実から目を背け、幻想を信じたいのは人の性なのだろうか。
1922年に宮沢賢治が書いた「春と修羅」の補遺のように、暗く冷たい湖に落ちている私たちは、そのことを受け入れて初めてそこから飛び立つことができる。
3.11以降、崩れかけている幻想の向こうの現実を見つめること、そして“飛騰”できるようにと願う。

中沢あき(なかざわ あき)

日本大学芸術学部映画学科映像コース在学中にSVPに参加。以降キュレーター及び映像作家として、インディペンデントシーンから教育機関や公共施設、映画祭やアートフェスティバルなど、様々な場と形で映像メディアに関わる。2006年制作のビデオ作品「願いをひく Drawing wishes」は、ベルリン国際映画祭、WRO'07、他世界各国の映画祭にて上映・受賞。ケルン在住。

Jan Verbeek(ヤン・ファベーク)

1966年ドイツ、ボン出身。89～96年デュッセルドルフ芸術アカデミーでナン・フォーバーとナムジュン・パイクに学び、その後ケルンメディア芸術アカデミーで学ぶ。ビデオ作品やオーディオヴィジュアル・インスタレーションを世界各国で展示、また個展や受賞も多数。2004年制作の「on a Wednesday Night in Tokyo」は、Tampere 国際短編映画祭ベストドキュメンタリー賞その他受賞、MoMA 所蔵作品。



To the eyes of sleepless nights

この作品は献花です。3.11 によって、失われた多くのものについて。前に進むその前に、祈りを。祈りのための静寂を。



Video Feedback Aleatoric no.1

ビデオ・フィードバックによって自動生成されたイメージとサウンドを使い、リズムをともなって即興演奏的に抽象的なパターンが次々と移り変わっていくパフォーマンス。



Making of Tokyo

3分11秒でわかる東京の作り方



ドンスカバン

ドンスカバンという言葉にはまったく「意味」がありません。震災直後、混沌とした情報網の中、私たちはある種「分かりやすい無意味」や「抽象」を見出したような気がします。それらは私たちにとって「ひとつの抛り所として機能した」という側面を意識した人は少ないと思います。その病的な囁きは、私たちの意志を剥奪し、白いスクリーンを凝視するかのような儂い現象を起こすと同時に、しだいに日常を明確に見せてくれたような気がしています。そして、それはさも「呪文」のオリジンであるかのように考えられるのです。



... ..,

3月11日にそれは発生しました。それの前では、私は無力であります。日々のニュースの中で、それはフィクション化しました。しかし、私の体の中には沢山の悪性物質がおそらく存在しています。私はそれを目だけでなく、身体全てで受容していました。私はその映像を身体全てで受容していました。私は真実の映像を目にすることは出来なくなりました。

重松佑 (しげまつ ゆう)

1981年生まれ。2010年ミュージシャン KENKOU との共作で CD/DVD 『NEW DIMENSIONS OF THE WORLD』をリリース。自然の風景を撮影した映像から、幻想世界を紡ぎ出す映像作家。一見ミニマルとも見える映像に、宇宙的なスケールを持ち込んだ作風は「はるか彼方」とのつながりを見る者に想起させる。映像と物語の関係性を、新しい形で表現しようとするその作品は国内外での実験的な映画祭や、映像フェスティバルで受賞、上映多数。

河合政之 (かわい まさゆき)

哲学的かつ先鋭的な映像作品を制作、世界30ヶ国以上で作品発表、受賞多数。文化庁や各種財団の派遣芸術家として、NY、パリ、イスラエルなどに滞在。展覧会のオーガナイザーや文筆家としても活躍する。現在、「Visual Philosophy」のコンセプトにもとづいて、新たなメディア文化を立ち上げるべく、さまざまなビデオアートのプロジェクトを展開。ジャンルを超えてその活動が注目されるアーティスト。

佐野洋介 (さの ようすけ)

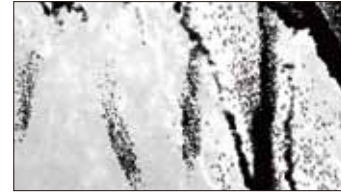
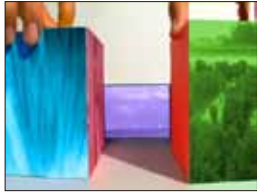
1985年、東京都出身。映像クリエイター、ICLABO 代表。2008年に映像、音楽、舞台、アートなど様々な表現者と「共に何かを何かで伝えたい」という思いでアーティスト集団「ICLABO」を立ち上げ代表を勤める。映画・ドキュメンタリー・PV・ビデオアートなど幅広く作品を作り続けている。

大江直哉 (おおえ なおや)

1983年生まれ。ビデオアーティスト、映像ディレクター、カメラマンなど様々な顔を持つ。シングルチャンネルビデオからVJパフォーマンス、インスタレーションなど様々な形で映像作品を手掛ける。大槻竜二、工藤泰士らとメディアアートユニット「RhizomeTV」(2006)を結成。以後、design art unit NORとしてデザイナー・吉田亮子と映像を映し出す本(オブジェ作品)「After book」を手掛けるなど、既存の枠にとらわれないマルチな活動を続けている。

石井陽之 (いしい はるゆき)

1984年に東京の東部に生まれる。現在は日本大学芸術学部助手として勤務。映像・インスタレーション・音楽制作・DJ活動等々をしています。学生時代は都市をテーマにした映像作品を制作。近年は日々変化するインターネット世界と現実世界で起きた事件を自身の日常生活にフィードバックした作品を制作しています。



a found beach

見知らぬ海岸の、何時かの瞬間、その人達は一体何をしていたのだろうか？古い絵ハガキの写真の中から、4色分解の網点で定着された記憶の欠片を捜してみる。それは、記録伝達における、写真技術と印刷及び紙媒体についての考察でもある。

Tangram

日々何気なく撮ったビデオ映像がパズルのピースになる。それらピースを、傾け、組み合わせ、自分が生きた時間、知覚した世界を形作ってゆく。

commemorative photos

一枚の写真には、無数の記憶が刻まれている。しかし、それを見て懐かしむ全ての人を失った時、写真は何のためにあるのかと考える。なぜ撮るのか。なぜ残すのか。

Hi-Kage

火は役に立つが害にもなる。古代より畏敬の対象であった火を人間はエネルギーとして利用することで、文明を築き上げた。火は命の象徴とされる一方で死や破壊の意味も含んでいる。そして、火を見つめることで人の心は内省へと導かれ、また、慰められる。

Bye Bye Alfred

しかし、“鳥”さえもどこかへ行ってしまうのです。鳥たちは理想郷を求め、人間にとって恐怖たりえるものなど気にすることなく生き抜いていくのです。さよならアルフレッド、もう行かなくてはならないのです。

大島慶太郎 (おおしま けいたろう)
1977年北海道釧路市生まれ、札幌市在住。2004年北海道教育大学大学院修了。現在北海道情報大学情報メディア学科講師。「動画構造の解体と再構築」をテーマに実験映像作品を中心とした制作活動及び映像メディア表現についての研究を続けている。また、映像メディアをパーソナルな表現ツールとして捉え、上映企画やワークショップなどの活動も展開している。

瀧 健太郎 (たき けんたろう)
1973年大阪生まれ。武蔵野美術大学大学院映像コース修了。文化庁派遣 芸術家研修員('02)、ポーラ美術振興財団の研修員('03)として、ドイツでメディアアートを学ぶ。「アジアアートビエンナーレ2009」(台湾国立美術館)、「Video Life」(2011, StPaulstGallery, NZ)、「黄金町パズール2011」にて屋外での映像投影、ビデオアート先駆者の証言を集めたドキュメンタリー「キカイデミルコト」(2011)など作品発表、啓蒙活動を行なう。
<http://www.netlaputa.ne.jp/~takiken/>

佐竹真紀 (さたけ まき)
1980年北海道豊頃町生まれ。北海道教育大学大学院修了。写真を使ったアニメーションで“記録”と“記憶”の狭間にある世界を探究している。「NHK-BS デジスタ・アワード2006(東京)」映像部門グランプリ、「ASK? 映像祭コンペティション2009(東京)」大賞、「12th Paris Festival of Different and Experimental Cinemas(フランス)」グランプリ、「25. Stuttgarter Filmwinter(ドイツ)」最高賞Norman 2012受賞など。

島田清夏 (しまだ さやか)
日本大学芸術学部映画学科映像コース卒。学生時代より花火打揚従事者として現在まで、株式会社丸玉屋にて花火を打ち揚げている。大学卒業より、アートディレクター毛利臣男に師事。現在、アーティスト中谷美二子のアトリエ、プロセニアにて勤務。主な作品歴として、オーバーハウゼン国際短編映画祭インターナショナル部門ノミネート(ドイツ)、サンテティエンヌビエンナーレ参加(フランス)等。

田中廣太郎 (たなか こうたろう)
1979年東京生まれ。作品はイメージフォーラムフェスティバル、ロッテルダム国際映画祭、EMAF、International Cinema Film Festival of Aix-en-Provence など国内外問わず多数の映画祭で上映、受賞される。
<http://kotarotanaka.net>